単元指導計画　１年生　第２章　２節『古代国家の歩みと東アジア世界』　　(全１１時)

【単元の目標】　国家がどのように成立していったのかという探求課題を考えることを通して、天皇中心の国づくりから律令国家成立までの国家の形成過程には東アジアとの交流が関係していることに気付き、大陸の文化や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられたが、律令制度が次第に崩れ、貴族政治が展開されていったことを理解することができる。

【知識・技能】	【思考・判断・表現】	【主体的に学習に取り組む態度】
①国家の仕組みが整えられた過程や天皇や貴族の政治が展開したことを理解している。 ②東アジアの文化や制度を取り入れながら、仏教やその影響を受け、国際的な要素をもった文化が栄え、その後、文化の国風化が進んだことについて様々な資料を適切に選択して読み取ったり、説明したりしている。	①聖徳太子の政治と大化の改新、律令国家の成立、摂関政治という歴史の流れについて、都の様子、農民の暮らし、東アジアの国々との関わりなどの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を表現している。	①国家の仕組みが整えられ、天皇、貴族の政治が展開されたこと、国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことに対する関心を高め追究している。 ②追求課題について、話し合い活動や資料の読み取りに意欲的に取り組み、古代の政治の変化を追究している。

単元学習前の生徒の姿日本の社会は、大陸とのつながりの下で狩猟・採取中心の生活が農耕の広まりとともに変化し、豪族の連合による大和朝廷が誕生することで、国家としてまとまってきた。当時の飛鳥が大和朝廷に与えた影響もわかった。その後中国や朝鮮の影響を受けた日本では、どのような政治がおこなわれたのだろう。

●指導に生かす評価　○記録に残す評価

天皇を中心にどのような政治をして国をまとめていったのだろうか。

①聖徳太子の政治改革　●**【知識・技能①】【主体的に学習に取り組む態度①】**
・聖徳太子や蘇我氏が目指した政治や文化の特色を理解し、隋との関係に着目して考察し、表現することができる。
聖徳太子や蘇我氏は、どのような国づくりを目指したのだろう。
聖徳太子は蘇我氏と協力して、冠位十二階や十七条の憲法により、家柄にとらわれず、天皇を中心とする国づくりを目指した。また、遣隋使によって中国や朝鮮の進んだ制度や文化を積極的に取り入れようとした。

②東アジアの緊張と律令国家への歩み　○**【知識・技能①】**
・聖徳太子死後の日本の政治改革について調べる活動を通して、大化の改新や白村江の戦い、壬申の乱を経て、天武天皇は唐や新羅に負けない天皇中心の律令国家を作ろうとしたことが理解できる。
中大兄皇子や中臣鎌足は大化の改新でどのような国づくりを目指したのだろう。
中大兄皇子らは新しい政治の仕組みを作り、公地・公民として国家が直接支配する方針を作った。百済救済のため唐・新羅との白村江の戦いや壬申の乱を経て、唐や新羅に負けない律令を中心とする国づくりを進め、天皇中心の中央集権国家を目指した。

③律令国家の成立と平城京　●**【知識・技能①】**
・奈良時代の都や前項の様子を調べる活動を通して、律令国家の支配の仕組みに気づき、律令国家の特色について理解することができる。
日本は唐のどんなことを取り入れて国づくりをしたのだろうか。
日本は隋や唐のような強い国づくりを目指したため、律令国家としての仕組みを整えた。役所の仕組みを整え、地方は国に区切られそこに役人を派遣したり、地方の隅々まで都とつながる道を整えたりして、中央集権国家を作り上げた。

④都づくり　●**【知識・技能①】**
・奈良時代の都づくりの様子を調べる活動を通して、何もないところから都をつくるためには多くの資材や人材が必要なことを理解することができる。
都づくりはどのように行われたのだろう。
日本は隋や唐に倣って強い国づくりを進めるために、都づくりにもその考え方が活かされ、碁盤の目のような整備された巨大な都を作り上げた。一つ一つの建物も大きく、全国から多くの資材や人が集められた、国家の一大事業だった。

⑤奈良時代の人々の暮らし　○**【知識・技能①】**
・当時身分制度があり、その身分に応じて暮らしぶりが違うことを知ることを通して、当時の民衆たちが様々な税によって、苦しい生活を強いられていたことに気づき、当時の暮らしぶりを想像することができる。
律令国家の下で人々はどのような生活をしていたのだろう。
貴族と民衆の生活ぶりは全く違う。それは、律令制のもとで民衆に与えられた祖・調・庸の税の仕組みによるものだとわかった。納税は非常に苦しく、逃げ出す者もいた。

⑥奈良時代の飛鳥の人々の暮らし○**【思考・判断・表現】**
・飛鳥の地では、全国で唯一庸・調が免除され、その代わり毎年大工を百人送り込むことが義務付けられた特殊な場所であったのはなぜなのかを考える活動を通して、当時の飛鳥の人々の木工に対する技術力の素晴らしさを理解することができる。
なぜ飛鳥では、全国で唯一庸・調が免除されていたのだろう。
飛鳥の大工たちは、都でも需要とされる建築物の建設に関わっていることがわかった。また、自分で大工道具を作るなど、非常に器用な人たちだということもわかった。だからこそ朝廷では、その力が必要だったのだと思う。しかし、その労働はとても過酷だった。それが今も飛鳥の匠として根付いていることがとても誇らしい。

⑦飛鳥～天平文化○**【知識・技能②】**
・代表的な文化財について調べる活動を通して、飛鳥～天平文化が国際色豊かな文化であることに気づき、遣隋使や遣唐使の派遣が果たした役割や二つの文化を比べたときの発展などについて理解することができる。
飛鳥文化や天平文化は、どのような特色をもっていたのだろう。
奈良時代は大仏や寺を建て、仏教の力で国を守ろうとしていた。飛鳥～奈良時代の文化は、仏教や唐の文化の影響を受けた、国際色豊かな文化だった。飛鳥文化よりも天平文化は、アジアだけでなくヨーロッパの文化も伝わってきて、国際交流が活発だったことがわかった。

⑧平安京と律令国家の変化●**【思考・判断・表現①】**
・都が平安京に移された後の変化を読み取る活動を通して、律令国家を立て直そうとした動きがあったことに気づき、新しい仏教の登場や遣唐使の停止などの政治や社会で変化が起きたことを理解できる。
平安京に都が移って、政治や社会はどのような変化があったのだろう。
平安時代になり、朝廷は律令制度を立て直そうとしたが、戸籍を偽る者も現れ、班田収授法も消えた。一方で朝廷は、やっと思いで勢力を本州全体に広げた。新しい仏教が広まったり菅原道真によって遣唐使が停止されたりと、社会は変わった。

⑨摂関政治の時代○**【思考・判断・表現①】**
・藤原道長が政治の実権を握った学習をしたことをもう一度思い出し、そのことで中央だけでなく地方の政治も乱れ、律令国家の仕組みが崩れていったことを考えることができる。
藤原道長の摂関政治によって、政治の仕組みはどのように変化したのだろう。
藤原道長が摂関政治を行った中で、班田収授法が行われなくなると、地方の郡司に逆らう者が現れたり、私腹を肥やす国司が現れたりするなど、地方の政治が崩れた。政治の権力は、天皇中心から貴族のような力を持つ者に移っていった。

⑩国風文化●**【主体的に取り組む態度①】**
・貴族の文化についてしらべる活動を通して、国風文化音特色に気付き、遣唐使の停止によって国独自の文化が作られようとしていったことを理解することができる。
貴族中心の文化はどのような特色があるのだろう。
遣唐使の停止によって、唐との関係が変化すると、唐風の文化をもとにしながら、日本の風土や生活ぶり、日本人の感情にあった文化を生み出していった。そこで生まれたものは、今も使われているものが多くある。

⑪単元のまとめ（古代日本のキーパーソンはだれだろう）○**【主体的に学習に取り組む態度②】【思考・判断・表現①】**
・古代日本のキーパーソンは誰かを考える作業を通して、古代の日本を大観し、時代の特色を捉える。
古代日本において『政治』『国際関係』『文化』において、どのような人物が重要な役割を果たしたか、「クラゲチャート」をもとにまとめよう。
私は、古代のキーパーソンを天武天皇にしました。律令や歴史書の作成を命じ、天皇を頂点として権力を中央に集めた国づくりをしたからです。古代は、律令に者づいて国づくりがすすめられた時代です。中国でつくられた律令が、国づくりに有効だと考えられ、律令制度を取り入れました。天皇や貴族が中心に国づくりは行われました。

単元学習後の生徒の姿
天皇を中心とし、隋や唐にならって強い国づくりを進めるために、律令制度を取り入れ、律令国家を形成していった。しかし、その負担は農民にかかっていた。飛鳥では、庸・調の代わりに、建築技術力を提供し、都づくりに貢献した。律令国家の基本方針である公地公民は次第に崩れていった。律令制度の立て直しを進める中で、層や貴族が権力をもち、藤原氏中心の政治が行われるようになっていった。